

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12951

研究課題名（和文）アメリカン・現代期の文学作品におけるユートピア

研究課題名（英文）"Utopia" in Contemporary American Literature

研究代表者

Larson Michael・William (LARSON, Michael)

慶應義塾大学・法学部（日吉）・訪問講師

研究者番号：10840184

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は冷戦期のアメリカに現れたユートピア小説に新たな角度からアプローチすることである。特にこれらの作品が描く新しい種類の身体状態又は情動“affects”に焦点を当てることである。コロナ禍で当初の計画は変更となったが、研究過程で発見された新しい識見の結果として、焦点はシフトする。研究のカテゴリーの1つは、労働によって作成された身体状態であり、これはユートピア小説における、コミュニティの新理解に関する研究に繋がる。その結果として、アメリカの政治的左翼に対する冷戦の過程でコミュニティのアイデアがいかに変化したか、そしてユートピアのアイデアにどのように影響したかを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

簡潔に言えば、日本でアメリカ文学を研究することは、過去150年に渡り歴史が絡み合ってきたアジア太平洋における2つの大国間の相互理解の促進に役立つと考えられる。本研究では、ユートピア的なSF小説に焦点を当てることで、アメリカ文化において、重要な影響力のある側面としてのアメリカ大衆文化のより深い理解に役立った。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to approach the wave of utopian fiction that appeared in the United States in the second half of the Cold War from a new angle. In particular, the focus was to be on new kinds of bodily states or "affects," which these works depict. However, as a result of complications due to the corona virus and new insights found in the course of research, the focus gradually shifted.

One initial category of investigation was the bodily states created by utopian labor, however, this led to research on the new understandings of community in this wave of utopian fiction. Thus, this research revealed how ideas of community changed over the course of the Cold War on the American political left, and how this impacted ideas of utopia. Moreover, insights into the changing conception of community led to research on new conceptions of the self and attitudes toward totality, or the idea of the world as a comprehensible whole -- all of which were changing during the period.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 ユートピア ディストピア SF小説 冷戦期 マルクス主義文学理論 新歴史主義

1. 研究開始当初の背景

ウィスコンシン大学ミルウォーキー校で博士課程に在学中、Peter Sands 教授のユートピア文学に関連する授業を受講した。その後の総合試験(comprehensive examination)で、ユートピア研究に関連する 19 世紀のアメリカ旅行文学や旅行記のジャンルがサブ・フィールドの一つになり、ユートピア研究への関心をさらに深めた。

特に環境問題や気候変動、それらがもたらす災害など、さまざまな時代・地域で起こった過去の危機の痕跡を記したテキストに目を向け、ユートピア的想像力の生命力を吟味する研究は、今後科学的に予期しうるディストピア的未来を乗り越えるために重要なものだと考えたためである。博士号取得後も、この分野の研究を継続しており、その関心は徐々に 20 世紀、特に冷戦時代へと移行する。なぜなら、この分野は多くの人文科学的研究が盛んに行われており、また、ユートピア的著作が非常に活発に行われた時期でもあったからである。ユートピア研究は、多岐にわたる研究分野や、さまざまな国々の人々との対話に開かれた、将来性を強く感じさせるものである。

2. 研究の目的

申請当時、本研究の目的は、20 世紀のアメリカ文学のユートピア作品・ディストピア作品が、それ以前の時代のアメリカのユートピア作品とディストピア作品とどのように異なるかを解明することだった。その中でも特に、1960 年代から 1980 年代のユートピア作品の中に、この時代の新しい哲学的な概念とアプローチがどのように反映されたかということに関心があった。Ursula K. Le Guin、Samuel R. Delaney、Philip K. Dick、Octavia E. Butler など、SF のニューウェーブ作家を中心として、*The Dispossessed* (1974)、*Dhalgren* (1974)、*VALIS* (1981)、および *The Parable of the Sower* (1993) が、本研究の主要なアーカイブとして形成している。

本研究の当初の焦点はユートピアの中の身体に関連する情動 (“affects”) であったため、Sianne Ngai の *Ugly Feelings* (2005)、Brian Massumi の *Parables for the Virtual* (2002) を考察対象として、研究を進めた。しかし研究を進めるに従って、ここには仕事、労働、職業などが関連し、まずはその追求が必要であることが判明した。そのためマックス・ヴェーバーの『職業としての学問』(1917)、『職業としての政治』(1919)、John Dewey の *Democracy and Education* (1916)、ピョートル・クロポトキンの『田園・工場・仕事場』(1898) など、この分野に関連する哲学を足がかりに取り組み、加えて、コミュニティや全体性 (“totality”) などの基本的な概念についてのさらなる討究が、重要である。

3. 研究の方法

研究の方法として、以下の 2 点から進めていった。

(1) 研究に利用した枠組み

最終的に本研究で使用された枠組みは、マルクス主義文学理論と新歴史主義に基づいている。マルクス主義文学理論は、20 世紀にジェルジ・ルカーチやヴァルター・ベンヤミンなどの哲学者によって定義され、戦後にはレイ・アルチュセールや Fredric Jameson によって再定義されている。新歴史主義は、1980 年代に Stephen Greenblatt によって開拓されて以来一般的になった手法であり、文学を通じて知的歴史を理解しようと試みる。これらの枠組みを使用する理由は、歴史のおよび政治的出来事が思想の歴史をどのように形成し、それらの思想が芸術や文学にどのように反映されたかを理解する事は本研究の重要な目的の一つであるためである。Fredric Jameson の解明をきっかけとして、物質的条件や文化の変化がアメリカのユートピア的著作に与えた影響をより深く分析することに繋がった。

(2) アーカイブ研究・他研究者からのフィードバック

さらに、本研究はアーカイブ研究と他の文学者との研究討論を基注としている。Octavia E. Butler の作品に関するアーカイブ研究はカリフォルニア州パサデナの Huntington 図書館で行われ、Ursula K. Le Guin に関する研究はオレゴン大学の Knight 図書館で行われた。多くの人文科学の研究と同様に、このような研究では共同研究が重要な部分を占めるため、その分野の専門家からフィードバックを受け取り、議論できる学術会議で本研究を発表することも重要であった。

4. 研究成果

本研究時がコロナ禍とちょうど重なり、海外での現地調査の延期や学会の中止など、当初の予定をかなり変更せざるを得なかったが、その間は国内でできる限りの先行研究調査を進めた。それらを踏まえて、これまでに国内外の学会で口頭発表を4つ（うち一つはコロナの影響で学会が延期されたため、2023年の8月に開催される国際学会で口頭発表予定）、学术论文への掲載1つとある程度の成果を上げる事ができたと考えている。特に本研究のようにユートピアに関する研究は国内でもまだ取り上げられている数がそこまで多くないため、今後も国内外の研究者と活発に交流することも含め、さらなる成果をあげていきたい。

本研究の主な目的は、冷戦時代、特に1960年代、1970年代、1980年代にアメリカのユートピアおよびディストピアの著作に現れた新しい傾向を理解することである。そのため、当初は情動（“affects”）という個人主義的なテーマに焦点を当てたが、進めるうち本研究は、労働やコミュニティなどのより社会的な概念への変化と移行した。この概念の調査において、特に Ursula K. Le Guin と Samuel R. Delaney の主要な著作について独自の洞察を得ることができた。今後は、この概念の変化が冷戦後と21世紀のアメリカのユートピア・ディストピアの著作へどのように続いたかを解明したいと考えている。詳しい研究成果は、以下に年度ごとに記載する。

(1) 2020年度

コロナ禍の影響で、国内外の移動や現地調査が非常に困難になり、当初に予定していた研究計画の大幅な変更を余儀なくされたが、その年の冬、国内で行われた母校の大学の同窓生を対象に開催されたイベントで「disaster utopia」についてのプレゼンテーションを行なった。また、12月に中国で高い評価を受けているSF小説『The Third Body Problem』を批評したものを論文にまとめ、*Kyoto Journal* に投稿し掲載された。

(2) 2021年度

当初2020年度に行う予定であった、SF、ディストピア作家である Octavia E. Butler と、SF、ユートピア作家である Ursula K. Le Guin のアーカイブ調査をアメリカで実施した。それらに基づいたものを、2021年11月に日本英文学会関東支部第20回大会で「アーシュラ・K・ル・グインの『所有せざる人々』における仕事について」という論文で口頭発表した。さらに、同年6月、「Reading Kenji Miyazawa after 3.11, Region, Utopia, and Modernity」と題した日本の作家、宮沢賢治作品におけるユートピアの要素についての口頭研究発表を行った。2021年11月には、査読付き論文「Accumulating and Realizing the Radical Potential of Catastrophe in *Through the Arc of the Rain Forest*」を *Utopian Studies* へ投稿し掲載された。

(3) 2022年度

イギリスで開催された国際学会 Utopian Studies Society にて、フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーの哲学と Ursula K. Le Guin の小説についての論文、「Community in the Philosophy of Jean-Luc Nancy and Ursula K. Le Guin's *The Dispossessed*」を口頭発表した。また、国際的なユートピアの概念の追求を目的として、フランスのリール市で開催された「lille3000」において現地調査を実施した。同年10月に日本アメリカ文学会の第61回全国大会にてユートピア作家 Kim Stanley Robinson の作品に関する論文「Kim Stanley Robinson の小説に描かれる地質年代の考察—*Mars* 三部作と *The Years of Rice and Salt* における登場人物としての『社会有機体』」を口頭発表した。

(4) 2023年度（コロナ禍のため、延期された学会や論文投稿などについての言及）

2023年度中に、George Slusser 学者の *Science Fiction: Toward a World Literature* (2022) の書評が、*Science Fiction Research Association Review* にて出版予定である。2022年度中に申請し受理された2023年アメリカ学会第57回年次大会にて「Utopia, Totality, and Deconstruction in Postwar American Science Fiction」を口頭研究発表した（2023年6月実施済）。また、2023年8月ドイツで開催される国際学会 Science Fiction Research Association にて二つのディストピア作品の口頭研究発表予定である。一つは安倍公房の『第四間氷期』（1959）について、もう一つはアメリカのグラフィックノベル Low (2014-2020) をテーマにしている。今後も論文発表や学会への口頭発表など、精力的に継続していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Larson Michael	4. 巻 32
2. 論文標題 Accumulating and Realizing the Radical Potential of Catastrophe in Karen Tei Yamashita's "Through the Arc of the Rain Forest"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Utopian Studies	6. 最初と最後の頁 494 ~ 512
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5325/utopianstudies.32.3.0494	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Michael Larson	4. 巻 99
2. 論文標題 "The Vulgar and the Sublime"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Kyoto Journal	6. 最初と最後の頁 215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Michael Larson
2. 発表標題 "Reading Kenji Miyazawa after 3.11: Region, Utopia, and Modernity"
3. 学会等名 The 11th Asian Conference on Cultural Studies, IAFOR, Japan (online) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Michael Larson
2. 発表標題 「アーシュラ・K・ル・グインの『所有せざる人々』における仕事について」
3. 学会等名 日本英文学会関東支部第20回大会 (online)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Michael Larson
2. 発表標題 "Community in the Philosophy of Jean-Luc Nancy and Ursula K. Le Guin's 'The Dispossessed'"
3. 学会等名 Utopian Studies Society (in person) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Michael Larson
2. 発表標題 「Kim Stanley Robinsonの小説に描かれる地質年代の考察Mars 三部作とThe Years of Rice and Saltにおける登場人物としての『社会有機体』」
3. 学会等名 日本アメリカ文学会関全国大会第61回大会 (in person)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------